

小川原湖沼群で生態観察

第二回識別研修会終わる

昭和52年3月12・13日の両日、青森県小川原湖青年の家を会場として、本会主催による第二回「ハクチョウ類・ガンカモ科識別研修会」が開催された。これは前年度の「ウトナイ湖研修会」に引きつづいて開催されたもので、地元三沢市自然に親しむ会の共催、三沢市をはじめ、上北・東北・六ヶ所村の各市町村教育委員会の後援をえて実施された。全国からの参加者は約50名。

この催しについては全国紙・地元紙など各新聞が取材したが、ここに3月20日付河北新報（仙台本社）が報じた記事を、そのまま転載させていただいた。

〔昭和52年3月20日・河北新報記事〕

白鳥のエ付け 是か非か

上北町で日本白鳥の会が研修会

不足補う程度に

あくまで自然保護の立場で

全国の白鳥を愛する人たちで組織する日本白鳥の会（家田三郎会長）の研修会が、このほど上北町の小川原湖青年の家を中心に開かれた。白鳥の保護に努めている人たち50人が参加し、討論や小川原湖の白鳥観察など、有意義な2日間のスケジュールを終えた。このなかで最近、是非論が高まっている白鳥のエ付け問題が、大きな話題となった。

研修会には、北は北海道網走、南は島根まで、主に東北地方を中心とした愛鳥家が出席した。第一日は各地区の現況報告や研究発表。第二日は、小川原湖から上北郡六ヶ所村にかけての湖沼群で、白鳥を中心とした野鳥の生態観察をした。討論では、シベリアから日本に飛来する白鳥に対し、各地で行われているエ付けの問題が、中心となった。

エ付けについては、一部の動物学者から「野生の生活力を失わせ、結局は死につながる。野鳥保護にはならない」と有害論が出されている。これに対し、北海道苫小牧郊外のウトナイ湖でエ付けをしている木下茂さんらは「自然が失われ、エサが不足してきているのでエ付けは必要。特に今冬のような異常寒波の年は、湖沼の凍結期間が長いので、特に必要」とし、愛鳥家の意見が分かれている。このため、むつ市などでは、いったん中止したエ付けを、今冬から再開するといったケースも出ている。

研修会では、同会副会長で札幌市内で開業医松井繁さんが「エ付けを受ける白鳥は、せいぜい全体の10%程度。標識調査でも、ほとんど毎年帰ってきているので、エ付けによる悪影響はない」と、有害論に激しく反発して必要性を力説した。また、長い間エ付けを続けている平内町の畠山正光さん、むつ市の古川博さん、酒田市の阿部敏雄さん、福島県猪苗代町の大森常三郎さんたちも、子供たちの愛鳥心

を養い、情操を豊かにしていると、プラス面を強調した。

地元の三沢自然に親しむ会では、エ付けをしていない。その理由は、小川原湖沼群という、白鳥の絶好のエサ場があるため。司会からは、野生の白鳥を観察することに主力を置いて活動していることが報告された。

これらの意見に対し、環境庁鳥獣保護課職員の堀内盛一さんは「エ付けは、本来はすべきでない。しかし地域によっては、飢え死にしないように、エ付けを必要とするところもある。その場合でも、いったん始めたら、毎年続けることが望ましい」と発言。結局、司会としては、エ付けの是非をケース・バイ・ケースで考え、行うときも、自然保護の立場から、不足を補う程度にする一との線に落ち着いた。

現在エ付けが行われていない小川原湖沼群でも、開発に伴う植物生態の変化で、やがてはエ付けをしなければならなくなるのは明らか。県野鳥の会会長の三上士郎医師（むつ市）は「白鳥のエ付けは、それだけ日本の自然度が失われている証拠。いつしか、鳥も鳴かないふるさとなりかねない」と、進む自然破壊に警告している。

